MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．７．１６　発行元
第 376 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

桜庭一樹「赤朽葉家の伝説」

若い読者にお薦めする本として桜庭一樹の『赤朽葉家の伝説』を取り上げようと思う。『ＧＯＳＩＣ』シリーズで知られた桜庭一樹だが、それとは違った意味でインパクトのある『赤朽葉家の伝説』である。

桜庭一樹の初期代表作

桜庭一樹は１９９９年に作家としてデビューし、２００３年から『ＧＯＳＩＣ』シリーズを開始した。最初はミステリという分野に片足をかけたぐらいの位置取りだった。それが明確に「ミステリ作家」としての地位を固めたのは２００６年の『赤朽葉家の伝説』（東京創元社）から。この作品が日本推理作家協会賞を受賞して世間に広く認められることになる。

本作は『このミステリーがすごい！』の年間ランキングでも第二位に入り、注目を集めた。その後、『私の男』で直木賞を受賞して今では実力者として幅広く活躍している。特に感心するのは、読書量とその幅の広さ。これは超人的。

『赤朽葉家の伝説』とは…

ミステリで『〇〇家の…』と言うと、横溝風の名探偵が登場して…パターンを思い浮かべてしまうが、本書は全く違う。『文庫本あとがき』の中で作者は、ガルシア・マルケス、イサベル・アジェンデ、ヴァージニア・ウルフの名前を挙げ、「一族の女三代の年代記」という構想を説明している。そして更にスチュアート・ウッズの『警察署長』の名を挙げて、女三代を巡る長い時間に、ひとつの謎が存在し続けて、物語の最後にようやく解けるという謎解きの配置についても解説している。

作者の眼が向いているはあくまでも海外作品であって、殺人事件が起き、名探偵が登場して手掛かりを集めていくような「本格もの」構造を目指していないことを提示している。物語の流れで読者を引っ張っていく、そういう作風なのである。

一族の女三代の年代記

鳥取県の製鉄業から巨大企業を興した旧家・赤朽葉家。戦後すぐくらいの頃に「辺境の人」に村に置いていかれた祖母・万葉は、やがて赤朽葉家に嫁に入ることになり「千里眼奥様」と呼ばれるようになる。未来の一部を見ることができる能力が隠されていたからだ。万葉はずっと長生きをして、平成の世まで家を守ることになる。

その娘の赤朽葉毛毬は漫画の才能を見出し、昼夜を問わずの作業に打ち込むが、一家の運命に翻弄されることになり…。

三代目にあたる孫の赤朽葉瞳子は万葉に多くのことを学びながら、寂れていこうとする旧家を必死に守ろうと努力していく。このような一族の生き方の全てが読者を物語の中に巻き込んでいく。そこには「ミステリ」という意識はもうない。ひとつのストーリーとして読めればそれでよいのである。

戦後の昭和を辿る旅

私には昭和の歴史を辿る物語のようにも思える。景気のよい時代もあり、低迷の時期もあった。そんな中を生きてきたんだなぁと思う。

いくつかの謎は万葉の「未来視」関連が多い。「首が飛ぶ」「飛行人間」…。そこに事件があったのかどうかわからないように、そっとそっと描かれている印象。

『ＧＯＳＩＣ』シリーズ

既に第７５号で特集して紹介している。２０１６年の『ＧＲＥＥＮ』以降、新作が出ていないので気になっている。アメリカに渡ってのその後のことがどう展開していくのかを楽しみに待っている。

『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』

２００４年富士見ミステリー文庫。私はこの版で読んだ。私好みの内容ではないし、世の中の話題にも上らなかったが、不思議に読後の印象は強かった。生徒向けに学校の理科室前廊下に設置した私個人の本棚に並べておいたなら、いつのまにか消えていた。誰かが読んで返すのを忘れたのか…。気に入ってくれる生徒がいたなら、それはそれでよしということにしなければ…。その後、桜庭一樹の初期の代表作のひとつに上げられるようになり、単行本になり、角川文庫にも収められた。直木賞受賞後に再評価された本とも言える。読み返してみても、今風のミステリのようにも思える。

中学二年生の「あたし」＝山田なぎさが主人公。でも、それ以上の存在みたいにして現れるのが海野藻屑。都会からの転校生。父親はバンドをやっていた有名人らしい。家庭内での虐待が窺われる箇所がいくつかある。初対面の時から、なぎさと藻屑は反発しあい、引き付けあい、絡み合っていくことになる。「あたし」は「あたし」で内面に抱えているものがあり、早く大人になりたいという焦りが全ての行動に結びついていく。表紙を開けた最初のページに「新聞記事により抜粋」という事実部分の悲惨な結末は提示してあり、物語はその結末に向かってひたむきに突き進む展開。桜庭ワールドの片鱗が存分に感じられる作品と言える。